

北海道医歌人会詠草

叙勲

瑞宝双光章の重みかみしめ宮中の広き廊下を静かに歩む

七列に並び階段昇りつつ拝謁のための心ととのふ

吾が前を過ぎて陛下は立ち止まり車椅子のる人に声かけ給ふ

五十五年診療を続けて左中指が曲がっているのに今気がつきぬ

休日とはまことの休みか久々のこの安らぎも早や夕暮れとなる

旭川 稲積 文字

北国

北国をヒポクラテスは良しといふ頭に抜ける寒風があり

北国の寒風の中凜として長寿を遂げる生き様があり

北国は厳しいからに人材の生れる土地と人はいふなり

北国に生まれしわれはいかならむ人は人なりわれはわれなり

北国の鉛色の空南国の空いかなるかふと想ひあり

江別 三宅 浩次

救ひの手

不況とふ悪名のもと打切らる派遣社員に救ひの手伸ぶ

路上にて TENT 生活体験は地震の恐怖まきに見るがに

通り魔は肉眼みゆれど心眼は視力失せしや現世さまよふ

先人愁ひ油断いましめ予期せざる夜半の嵐のすさまじさ説く

確固たる政策のもと樹立せし国家も崩るや蟻の一穴

札幌 山口 康徳

新春雑詠

「裸者と死者」の舞台となりしニューギニアマノクワリ当りが震源地といふ

終戦と決りて開けし最後の米穀象虫のうごめきてるき

たらば蟹の身のゆたけきを頬ばりて今暫くは生きざらめやも

この夏のマラソンに構内も走るとふ試験管などの揺るること勿れ

九十の血圧にたはやすくまろびたり雪の結晶の輝く路に

札幌 小国 孝徳

弱虫のうた

年末の欠礼挨拶一月の新聞黒梓友の死つづく

幼き日蒲柳のわれが強かりし友より長く生きる不可思議

運動会常に末尾を駈けたればあの世の呼びも後廻しなる

持久走登山遠足落伍して負担掛ければ疎む友いて

投飛ばされ竹刀で打たれ中学の英語代数脳味噌味増味む

札幌 古屋 統

退院して

退院し戻れる我を迎へたる職員目の皆暖かく

杖つきて回診に行きし病室に「大丈夫かと」声かけくるる

入所者が急変せしと車椅子携へ我を迎へに來たり

手術せし股関節には痛みなく変形症の膝は重たし

八十路過ぎ己が身体を過信して転びし怪我を我は悔ひるる

美唄 吉村 誠治

キク

枯れ花と枯れ葉のキクが立ち出でぬ朝まだ闇の出勤にして

舗装路の氷の粒が街灯にささめき光る地上の銀河

愛煙の宿命と言ひ諫むれど心疾患の進展兆す

昨日餓へ今日果つる人ありといふ難民情報レターが届く

人情の機微細やかと評す人雀の歌が好きなど言ひて

札幌 浜島 泉

北帰行

母親をバットで殺せし少年がチャリで目指せる最北の海

天も地も白くふぶきてあえかなる命となりて薄れゆく影

風強き雪の斜面に執念の根のみ残りて芽ぶく春待つ

雪原の川面は氷に閉ざされどなほその下に脈々の流れ

ぼんやりと街灯の照らす雪道を闇に残して「宗谷3号」

釧路 児玉 昌彦

春の風

大雪のパウダースノーに埋もれて春のスキーは楽しむずかし

春の海見下ろす崖の風強し負けずには唄ふ浜田省吾を

春の陽にうたた寝したる老犬は吾が呼べども薄目開くのみ

春の夜にほろ酔ひて聴くマイルスのトランペットはけだるく響く

過ぎ去りし春の想ひ出ふたつみつひと傷つけしこともありけり

栗山 高田 剛太